

2005年度 学校教育研究科学位論文

中学校英語科における辞書の活用に関する研究

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科（修士課程）

教科・領域教育専攻 総合学習系コース

M04301B

和泉屋 喜子

目 次

第1章 問題の所在	1
第2章 中学校英語教育と辞書	4
第1節 英語辞書と学習指導要領	4
1. 中学校英語科における辞書指導の現状	5
第2節 英語学習における辞書の構造	6
1. 英語学習における辞書の役割	10
第3節 中学生と辞書	11
1. 生徒側からみた辞書の捉え方	12
第4節 中学校英語科における辞書指導の課題	13
第3章 中学校英語教員の辞書を使った学習の捉え方	15
第1節 研究目的	15
第2節 研究方法・対象	15
第3節 結果	16
1. 中・高における授業の中での辞書活用についての現状	16
2. インタビュー結果からの分類	17
3. 考察	28
第4章 辞書に関する中学生のとらえ方	31
第1節 研究目的	31
第2節 研究方法・対象	31
1. 授業で用いた教材	32
2. 「辞書づくり」について	32
3. 授業のねらい	32
4. 授業計画	33
第3節 結果	35
1. 辞書使用に関するアンケート調査	35
2. 「辞書づくり」の授業の様子	38
3. 実践後のアンケート調査	41

4 . 実践後のアンケート調査結果.....	42
5 . 考察.....	46
第5章 全体考察.....	49
引用・参考文献.....	54
巻末資料.....	58
謝 辞.....	61

表の一覧

表 1	中・高における授業の中での辞書活用についての現状.....	17
表 2	中・高の英語授業におけるカリキュラムの違い.....	18
表 3	中・高の英語授業において求められているもの.....	19
表 4	中・高の英語授業の中で生徒の興味・関心を何に求めるか...	21
表 5	中・高における辞書使用と授業形態の整合性.....	22
表 6	中学校での辞書の取り扱いについて.....	24
表 7	中・高の英語教員における単語に関する捉え方.....	25
表 8	自己教育力の育成という観点からみた辞書使用の捉え方.....	27

図の一覧

図 1	「辞書づくり」活動で生徒が作った作品例.....	34
図 2	あなたは英語が好きですか.....	35
図 3	あなたは英語を学習する上で、辞書を使いますか？.....	36
図 4	あなたは、新出単語を調べる時、どのようにして調べますか？	36
図 5	あなたは、どのような場面で辞書を引きますか？.....	37
図 6	あなたは、今回の活動を通して辞書を以前より身近に感じましたか？.....	41
図 7	辞書を引くことを通しての気づきと自己教育力への深まり	48

第1章 問題の所在

今日、生徒を取り巻く環境は、受験戦争の過熱化、いじめや不登校の問題、学校外での社会体験の不足など、様々な課題が生じている。また、我が国の社会は、国際化、情報化、科学技術の発展、環境問題への関心の高まり、少子・高齢化等の様々な面で大きく変化していくことが見込まれ、これらの変化を踏まえた新しい時代の教育の在り方が問われている。

このような背景を下に、1998年度、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を培うことなどをねらいとして、学習指導要領が改定され、また、これまでの教科の枠を超えた学習ができる「総合的な学習の時間」が新設された。

これまでの学校教育において、柴田（2000）は、教科書などに書いてある知識を一方向的に教え込むことが多く、子どもが「なぜ」、「これは本当か」などと問う学び方がされていなかったと指摘している。また、市川（2004）は知識が大切だからといって、それを蓄えておくことばかり促して、実際にそれを使って活動するというような場面が学校教育の中で少なかったのではないかと指摘している。

したがって、現在の学校教育において重要とされるのは、教科書などに書かれたものを単に暗記するのではなく、知識や技能の習得とともに、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考える力を育成することである。また、学習過程において、パソコン、図鑑や辞典類などの、さまざまな「学びの道具」を使って、情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの学び方や物の考え方を身につけ問題解決することである。そのため、「総合的な学習の時間」のみならず、各教科の中においても、自ら学び、自ら考える力の育成をすることが重要であると思われる。

では、中学校段階の教科の中で、問題解決する上で必要となる「学びの道具」を生徒に身につけさせるための指導が、一体どの程度授業の中で行われているのであろうか。ここでは、中学校の英語科につい

て検討していくこととする。

1998年の中学校学習指導要領の改訂によって、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」ことを目標に掲げている。また、今回の改訂により「外国語」を必修とし、英語を履修することを原則としている（文部省，1998）。

「実践的コミュニケーション能力」とは、単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっているというだけでなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力である。（『中学校学習指導要領解説－外国語編－』1999, p.7）

従来の生徒たちが、一定の基本的な知識を身につけていたとしても、それを活用できなかったのは、積極的に自分の考えを相手に伝えようとしたり、相手の考えを理解しようとしたりするなどのコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が十分ではなかったためである。

したがって、現在の中学校英語科では、実践的コミュニケーション能力の育成をより一層重視しており、言語の実際の使用場面に配慮した指導の充実を図り、実際に聞いたり話したりするなどのコミュニケーション活動を多く取り入れることを重視している。

また、教科書においても、コミュニケーションを重視して改善が図られており、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取りあげている。例えば、『英語が使える日本人』の育成のための「行動計画」（2003）の中では、新しい学習指導要領に基づいて編集された英語教科書の特徴として以下の点が挙げられている。

- ・ 文法・文型を単なる知識としてとどめるのではなく、具体的な場面や話題を設定し、自らの状況や自らの考えを表現させ、運用につなげていく工夫が一層なされている。
- ・ 言語形式(form)とともに、それが果たす発話での機能(function)、伝達したい概念(notion)や話題(topic)などの視点を取り入れられて

いる。

- ・スピーチやレポートなどからディベート，ディスカッションなども取り扱われている。
- ・具体的な場面や話題は学習者である生徒にとって身近なもの（学校生活，旅行など）が選ばれるようになってきている。
- ・個々の技能を別々に扱うのではなく，4技能を有機的に関連付けた形でコミュニケーション能力を育成していくことが目指されている。

このように，中学校英語科では，「英語でコミュニケーションができる能力」を育成するために，音声面での技能を重視しながら，言語の実際の使用場面などを踏まえ，情報や互いの気持ちや考えを伝え合うようなコミュニケーションを行い，単に「読む」，「聞く」受信にとどまらず，「話す」，「書く」発信技能を重視することが求められている。（文部省，2003）

そのため，自分の考えや自分の思いを発信する際に，一人ひとりが同じ内容で表現するのではなく，それぞれが自分の思いや考えを主張することが必要になってくる。

その方法の一例として，英語を学習する上で，英和・和英辞書などの「学びの道具」を用いることによって，自分の考えや思いをより一層多様に，表現することができるのではないだろうか。また，英語を学習する上で，辞書を用いて発展的な学習をすることができるのではないかと思われる。

米山（2003）は，「辞書は，英語学習の最も貴重な情報源であり，分からないことは教師に尋ねればよいが，教師がいつも身近にいるわけでない。しかし，辞書は常に手元に置いて参照することができる」と指摘している。このように，英語を学習する上で，「学びの道具」としての辞書を自らが身につけておくことによって，他の人の助けを借りることなく，自ら進んで発展的な学習を展開していくことができるのではないかと考えられる。そこで，本研究では，中学校の英語の授業において辞書を活用することを検討することとする。

第2章 中学校英語教育と辞書

第1節 英語辞書と学習指導要領

中学校の学習指導要領において、辞書指導は、どのように位置づけられているのだろうか。中学校の学習指導要領―外国語編―では、辞書の取り扱いについて、以下のように書かれている。

3 指導計画の作成と内容の取り扱い

キ 辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるようにすること。

(文部省, 1999, p.96)

このように、中学校学習指導要領（外国語編）では、「辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるようにすること」と記されている（文部省，1999）。中学校学習指導要領解説―外国語編―（文部省，1999）によれば、「必要に応じて活用できるようにすること」としたのは、授業での自己表現活動や家庭での学習で、他の人の助けを借りることなく、自ら進んで学習できるようにすることを目的としており、また、実践的コミュニケーション能力を育成するにあたり、辞書のより積極的な使用が求められていることを挙げている。

このように、中学校学習指導要領では、辞書指導について、積極的な使用が求められていることが見受けられた。それでは、次に、現在の中学校英語科では、一体どのような辞書指導が行われているのかについて検討していくこととする。

1. 中学校英語科における辞書指導の現状

詳しい研究内容として、山岸（1998）は、教員の辞書指導に関するアンケート調査を行っている。これによると、中学校で辞書指導をしていると答えた教員は、64%にのぼっていた。しかし、辞書指導にかける時間について尋ねたところ「3年間で2～3時間」という回答であった。また、指導内容についても「引き方の説明と練習」が約80%を占めていた。しかも、この調査は、対象が中学校英語授業研究会の参加者14名と少数であり、質問内容についても詳しく書かれていなかった。したがって、このような小規模な調査では、3分の2が辞書指導を行っていることが明らかになったものの、数量的なデータとしては、より大規模な調査が望まれる。

また、大規模な調査として、井上（2004）は、高知県全域の中学校英語教員を対象にした英和辞書指導に関するアンケート調査を行っている。この調査では、中学校英語教員248名（125校）にアンケートを配布し、そのうち106名から回答が寄せられた。その結果、中学校の授業の中で辞書を活用していると答えた教員は、37.4%であった。その中で、辞書指導にかける時間についての質問に対し、山岸（1998）と同様「年間1～4回」という回答であった。さらに、指導内容についても「辞書引き競争」、「単語調べ」などの意見が挙げられた。また、中学校で辞書指導ができない理由として「時間がない」、「学力差がある」、「教科書の巻末リストで十分」などの回答が多くあげられた。

これらの結果から、中学校では辞書指導にあてられる時間が少なく、また、指導内容についても「辞書引き競争」や「単語調べ」などだけでとどまっており、辞書指導が十分なされていないことが見受けられた。

さらに、井上（2004）のアンケート調査では、「中学校の授業の中で、辞書を使用した活動をする必要であるか」という質問に対し、「中学校で辞書を使うことが望ましい」と回答したものが77.2%であった。中学校で辞書指導が必要な理由として、「自学自習のため」、「情報量で知的探求心を芽生えさせるため」、「辞書必携の意識づけ習

慣のため」などの回答が多く挙げられた。この結果では、中学校英語教員の半数以上が授業内で辞書を活用することについて必要と考えていると推測される。

その点について、山岸（1997）は、「辞書は知識と情報の宝庫であり、活用しだいで授業の活性化にもつながる」と述べている。また、瀧口（2003）は、「自分で英語を学ぶという観点から考えれば、『辞書が使える』というのは、最低限の『ワザ』として押さえなければならない」と指摘している。

これら山岸（1997）、井上（2004）の研究から、中学生にとって辞書を活用することを必要と考えているにも関わらず、十分な辞書指導が行われていることが推察される。この背景にある彼らの教育そのものに対する考え方は、どのようなものであろうか。このことから、中学校の英語教員が辞書を使った学習に対してどのような考えをもっているかについて詳しく調べてみる必要があると思われる。

先行研究の中学校英語教員による辞書指導のアンケート調査などから、中学校英語教員は、理念として授業の中で辞書を活用することを必要と考えていたことが見受けられた。先ほど、英語学習において、辞書を使用する上で、山岸（1997）、瀧口（2003）らが英語学習において辞書はかかせないものであると指摘しているが、辞書にはどのようなことが記されており、また、中学生が、辞書を使用することはどのような点でよいのかについて検討していくこととする。

第2節 英語学習における辞書の構造

英語を学習する上で、辞書の有効性について第1章で少し触れた。それでは、英語を学習する上で辞書を活用するためには、辞書はどのような構造になっていて、また、辞書指導を行う上で、どのような点に留意すべきかについて検討していくこととする。

豊田（2003）は、辞書には、見出し語、発音記号、品詞の区別、語形変化、文型表示、語義、用例、語法、他品詞形、同音語・反意語、慣用句、語源などの全て、またはほとんど全てが載っていると述べている。この中からいくつかのものを取り上げて説明していくこととする。

語義

辞書の一番大きい役割として、単語の意味を知ることがある。しかし、一つの英単語に対して、日本語で説明されうる意味というのは、多岐にわたる。辞書の中でそれらの語義は、通常1, 2, 3, ……と番号をふって使用頻度の順で示してある。

小林（2005）は、英語を学ぶ生徒の多くは、辞書を引く際に、掲載されている最初の定義に飛びつく傾向があると指摘している。そのため、辞書の使い方を指導するにあたっては、第一の意味になるわけではないことを指導しなければならない（豊田，1986）。つまり、文脈に応じて語義の中から適訳を選ぶことが必要であり、その習慣が身に付いて初めて辞書を活用できていると考えられるのである。

品詞

発音が示された後に、単語の品詞が表示されている。ほとんどの場合、名詞→名 動詞→動 形容詞→形 など省略した形で示されている。意味を調べると同時に品詞を見ることによって、例えば文中の中で名詞は主語、（動詞や前置詞の）目的語、補語としての役割を果たすことや、動詞は、自動詞なら後に目的語をとること、他動詞なら目的語をとらないことなどを意識することができる。このように、単語がどの品詞で用いられるのかを知ることによって、語順や英語の文の仕組みをさらに深く理解することにつながる。

一見やさしそうな単語でも2つ以上の品詞をもつ語は多い（毛利，2004）。そのため、浜野（1999）は、英語では、1つの単語で複数の品詞をもつ場合が多く、どの品詞でその単語が用いられているのかを注意する必要があると述べている。

また、豊田（2003）は、生徒が辞書を使って自学自習できるようになるには、文中の語（句）がどういう品詞の働きをしているかが分かる必要があり、品詞に対する勘というべきもの（品詞感覚）がある程度身に付かないと、辞書を引くのに時間がかかり、見当違いの品詞を選んでしまうと指摘している。

このように辞書を引く上で、1つの単語でも、2つ以上の品詞を持つ語があり、文中の中で品詞がどのような働きをしているかについて、生徒に指導していくことが重要であると考えられる。

語形変化

品詞の表示のあとには、それぞれの品詞によって、名詞の場合には複数形が、形容詞の場合には比較級と最上級の形が、動詞の場合には過去形・過去分詞形・現在進行形など、示されているものがある。これは、文の中での文法的な意味や機能の違いを表すために、単語が音声形式を規則的に変わることを示している。

豊田（2003）は、語形変化に関しては、名詞の複数形、動詞の活用、形容詞・副詞の比較変化が品詞名の後に示されていることを、いくつかの語を引かせて、確認する必要があると述べている。また、そのことについて、語形変化は、上級生になってこれらの形が出揃ったところで意図的に指導する必要があると指摘している。（原田，1996）

語形変化は、このように使い方の決まりがあり、文脈の中でどのようにその単語が変化するかを見る必要があると考えられる。

用例

用例は、語義ごとに示されており、理解しやすい文脈の中で単語の使い方が示してあるため、より単語が分かりやすくなる。また、用例には、すでに学習した単語と関連させて新しい単語が入っているので、どのような表現で用いられているのかを知ることができる。

浜野（1999）は、用例には、語釈と同様、訳語を補助・補強する大切な役割があると述べている。また、笠島（2002）は、用例は、個々

の単語の訳語からだけでは出し切れない語感を与えてくれると指摘している。

豊田（1986）は、学習事典の生命は、この用例にあるといっても過言ではないため、用例に目をとおす習慣をつける指導が必要であることを述べている。

このように、学習者は辞書を使用する中で、用例を活用することによって、単語がどのような使われ方をしているかを知ることができ、より一層、その単語について、理解できるのではないかと考えられる。

反意語

見出し語の後ろの所に反意語が書かれている。反意語には、「遠い⇔近い」、「良い⇔悪い」などの程度の差を表すものや、「売る⇔買う」、「教える⇔習う」などの1つの事柄を見方や立場をかえて表現されているため、より単語の理解を深めることができる。

そのことについて、住出（2002）は、日本語でも「大きい⇔小さい」、「高い⇔低い」のように正反対の単語を並べると、お互いの意味がはっきりするように、英単語もその反意語と見比べることによって、理解度を上げることができると述べている。

語源

初級用の辞書には、情報量が少ないため語源などの個々の単語の細かなことなどについて記述されていないが、高校生や大学生用の辞書については語源情報などが書かれている。語源の欄には、フランス語やラテン語など、その単語がどこの国からきたのかが分かるため、もとなる語が示されていることによって、語の由来が分かるようになっている。

木村（2001）は、英単語の知識を増やしていくときに、「昔はこんな意味だった」とか、「単語のこの部分は～という意味を表す」といった、語源の知識を利用することにより、推測力につながると述べている。また、小林（2005）は、辞書を調べるときは、必ず語源やイディ

オムなどを含めてその項の説明を全部読むことによって、その語の記憶する率も高まり、そこから語彙量を増やしていく土台になると指摘している。

すなわち、辞書を引く上で、語源の知識を利用することによって、英単語の歴史や文化そのものの背景的知識を得ることにより英語の理解が深まるのではないかと考えられる。

これまで、辞書の構造について、語義、品詞、用例など、いくつかのものを取り上げて詳しく述べてきた。このように、辞書を引くことによって辞書の構造を知り、さまざまな情報が記載されていることが分かる。では、本来、英語を学習する上で、辞書の役割というものは、どのようなものであるのだろうか。

1. 英語学習における辞書の役割

辞書は、未知語の意味を理解できず、尋ねるべき教師や友人が身近にいない場合に語彙の正しい意味を知り、適切な訳語を見つけることに利用するのが一般的であると言われている。

奥津（1983）は、文脈によって辞書から適訳を探し出すとき、ピッタリとした訳語がない場合もあり、その場合には、全体の文章から単語のイメージを描き、適訳を自ら作り出せねばならないと述べている。また、小池（2004）は、辞書は、個々の語彙についての意味・発音・語法・コロケーションなどを提示してくれる情報の相互であり、語彙学習上欠かせない道具であると述べている。

これらのことから、英語を学習する上で、辞書の役割は、単語の意味を理解するだけでなく、発音や語法なども知ることができることである。そのため、1つの単語について、このような使い方があったのか、このような語源が背景にあってこの意味があるのか、などといったことが分かることによって、単語に対しての理解が深まると考えられる。

しかし、中学生の初期の段階では、辞書の構造や役割について、す

べてを一度に理解させることは難しいと思われる。そこで指導者は、生徒にまず基本的な部分、例えば語義が使用頻度の順で示されていることや、用例をみることによって、単語がどのように使われているかを理解することなどを教える必要があると考えられる。その上で、品詞、反意語、語源などその他の部分については、生徒が、実際に辞書を引く経験をするによって辞書はどのような仕組みになっているかを気づかせることが重要であると考えられる。

第3節 中学生と辞書

前文では、英語を学習する上で辞書の役割について述べた。なぜ中学生の初期段階から辞書指導が必要なのであろうか。

鈴木（1987）は、辞書は、自分で正しい意味を知るために適切な訳をみつける場合、自分で選ばなくてはならないが、その中で関連の知識を得ることができ推測力もつくとして述べている。さらに、授業の中で辞書を使用させる時間を取り、その上で生徒に考えさせ、生徒が理解したときの楽しさは格別であるし、また、文脈や論理で判断するという重要な知的訓練になるとしている。

また、大西（1999）は、英語を初めて学習する生徒にとっては、辞書を引くことによって、自らの両手を用いてアルファベットを追い、該当の語を目で確認し、発音をブツブツと音を出す作業の中に、抽象概念としての英語が具体的な事象として体感されると述べている。

このように、英語を学習する上で、中学校の初期段階から、辞書に慣れ親しむことが大切であり、また自らが吟味して意味を選ぶ経験を積み重ねることにより、英語の土台を形成することにつながることが言われている。

一方で、中学生にとっては、辞書を使うことは負担になり、中学生の段階ではまだ早いのではないかという指摘もされている。

隈部（1997）は、中学校で一応辞書指導も行うことになっているが、中学生の学力（語彙力）では、辞書を使いこなすのは困難であると述べている。

また、米山（1998）は、中学校教科書に出てくる単語数の多さから考えると、文脈から考えて、ある程度品詞や意味を予測して辞書を引き、さらに記載事項の中から求められている情報を選びだすのは至難の技であると述べており、辞書を引き慣れていないと、対象の語にたどり着くまでにかかなりの時間・労力を要すると指摘している。

さらに、瀧口（2003）は、英語が苦手な生徒にとって、単語を探し出すことに時間がかかり、探し出してもどれが合っているのかがわからないため、辞書を引くことは結構負担になると挙げている。

このように、中学生にとっては、辞書を引くことに慣れていないため、時間がかかり、英語を学習することを嫌になってしまうと捉えている向きもある。しかし、中学生に辞書を活用する際に負担に感じさせないためには、例えば、授業の中で映画のセリフや、歌の歌詞など身近な題材を利用することで、生徒が辞書を引きたくなるような教材を提示し、生徒の興味が引くように仕向けることが大切ではないかと考えられる。

では、本来、中学生は英語を学習する上で辞書をどのように捉えているのであろうか。

1. 生徒側からみた辞書の捉え方

萩野（1995）は、学習事典の利用実態などに関するアンケート調査を大学生 90 名に行っている。「今まで英和辞典の使い方の指導を受けたことがありますか」という質問に対し、「中学時代に辞書指導を受けた 31.1%」、「高校時代に受けた 25.6%」という結果であった。

この結果を全体からみると、約 3 割が辞書指導を受けていることになるが、約 7 割が辞書の調べ方や使い方については、十分な指導を受けていないことが明らかになった。

また、畠山（2001）は、大学生を対象に学習英和辞典の利用に関する調査を行っている。これは、大学生 98 名を対象にアンケートを配布し、97 名から有効回答が得られた。これによれば、「英和辞典の使い方について、中学または高校の時に解説や指導及び練習はありました

か」という質問に対し、全体の 53%が辞書指導を受けたとしている。その内訳として、「中学が 75%」、「高校が 25%」であった。その結果、学習者（生徒）は、高校よりも中学時代に辞書指導を受けていたことが明らかになった。

なお、これらは大学生を対象にアンケート調査を行ったものであり、中学生を対象とした辞書指導のアンケート調査は行われていないことが分かった。

また、井上（2004）は、1つの単語につき、教科書の巻末リストだけを活用して、わずかな情報として出会えない中学生が、英語で自己表現をする場合、英和辞典をどう活用しているのか、またその時、どのような感想をもっているのかは大変興味深いと述べている。

しかし、中学生が辞書をどのように捉えているかについての研究は、あまりされていない。

そこで、中学生の段階で、生徒が辞書をどう捉えているか、また、辞書指導がどのように生徒に伝わっているかについて見ていく必要があると考えられる。

第4節 中学校英語科における辞書指導の課題

現在、中学校英語科において、辞書指導がどの程度行われているか、また、指導内容としてどのようなものがあるのかについて、先行研究のアンケート調査などから知ることができた。その結果、辞書指導の内容としては「辞書引き競争」、「単語調べ」などだけでとどまっており、辞書を使った学習があまりなされていないことが明らかになった。その理由としては、「授業時数が週3時間しかないこと」、「教科書の巻末リストで十分」などが多数あげられていた。

一方、先行研究において辞書指導のアンケート調査などから、辞書指導が行われていないにもかかわらず、中学校の英語教員は、中学生にとって辞書指導を必要と考えていることが見受けられた。

このことから、中学校英語教員は辞書を使用することを必要と考えているにもかかわらず、なぜ授業の中で辞書を使った活動をしないの

であろうか。これは、中学校英語教員のどのような考えに基づいているのか、またその背景にある教育そのものに対する考え方は、どのようなものであるかについてみていく必要があると考えられる。そのためには、中学校英語教員が授業の中で辞書を使った学習をどのように捉えているかを実際に、聞いてみる必要がある。そこで、研究Ⅰで中学校英語教員が授業の中で辞書を使った学習をどのように捉えているかについてインタビューをすることとした。

また、生徒が辞書をどのように捉えているかについてみていく必要があると考えた。そのため、学習者（生徒）の立場からの先行研究をみたところ、辞書指導についてのアンケート調査は、大学生を対象としたものであり、中学生を対象とした研究はあまりされていなかった。

先行研究において、辞書指導の内容としては、ゲーム的な要素を取り入れた指導が行われていることが明らかになった。しかし、こういった指導は、生徒の興味を引くものであるが、英語学習における辞書の構造や役割について気づくことができないのではと考えられる。また、先行研究などからは、そのことについての研究があまりされていないことが分かった。

そこで、研究Ⅱで、生徒が辞書をどのように使用しているかについて調査し、生徒が辞書をどのように捉えているかについてみていくこととした。また、授業実践を通して、生徒が辞書をどのように捉えたかについて調査し、分析することとした。

第3章 中学校英語教員の辞書を使った学習の捉え方

第1節 研究目的

英語の授業において、中学校英語教員が辞書を使った学習をどのように捉えているかについて調査する。また、中学校の延長線上に高校があるものとして、比較対象として高校英語教員にも調査することとした。

第2節 研究方法・対象

対象としたのは、大学院在籍中の現職の中学校英語教員8名と、高校英語教員5名である。

調査期間は、2004年12月～2005年6月の間に計13回、約30分程度のインタビューを行った。また、インタビューは、後ほど、文字化記録をして分析するため、ビデオを設置しながら行った。

インタビューの内容については、以下の内容で質問をした。

- ・どのような流れに沿って、英語の授業を展開しているのか。
- ・授業の中ではどのような工夫をするか。
- ・単語はどのようにして教えるのか。
- ・授業の中で辞書を活用することはあるのか。
- ・授業の中で生徒に身につけさせたいものは何か。
- ・外国語を学ぶ意義について、どのような考えをもっているのか。

これらを踏まえて、中学校と高校の英語教員が、授業の中で辞書を活用することについて、どのように捉えているかを分析することとした。

第3節 結果

1. 中・高における授業の中での辞書活用についての現状

まず、インタビューから、(A)授業の中で辞書を活用している・(B)授業の中で辞書を活用していない、の2グループに分けた。その結果、Aに分類されたグループは、全て高校英語教員、Bに分類されたグループは、全て中学校英語教員であった。(表1)

表1 中・高における授業の中での辞書活用についての現状

(中8・高5)

A 授業の中で辞書を活用している	高校英語教員 5名
B 授業の中で辞書を活用していない	中学校英語教員 8名

Bグループの中学校英語教員らは、現状として授業の中で辞書を活用していないのであるが、「辞書の重要性を教える必要がある」、「アルファベットの定着になるのではないか」、「単語の理解が深まる」、「学習の助けになる」など、理念としては辞書を活用しなければならないと感じている者が多数であった。

では、授業の中で辞書を活用している・していない、の2つに分けたところ、中学校・高校ではっきりと分かれたのはどのような理由があるのだろうか。また、なぜ中学校英語教員は、辞書を活用していないにもかかわらず、このような意見を述べたのであろうか。

それを知るためには、中学校・高校の英語教員が授業の中で、辞書を活用する・しない理由について詳しくみていく必要があると考えられる。そこで、次からはインタビューの内容について分析した結果を見ていくことにする。

2. インタビュー結果からの分類

まず、中学校英語教員が辞書を活用しない理由、高校英語教員が辞書を活用する理由、を分析した。

その結果、中学校・高校の英語教員が、辞書を活用する・しない理由の観点として考えられるものについて、以下の7つの点が大きく関わっているのではないかと考えられた。

- ①中・高の英語授業におけるカリキュラムの違い
- ②中・高の英語授業において求められているもの
- ③中・高の英語授業の中で生徒の興味・関心を何に求めるか
- ④中・高における辞書使用と授業形態の整合性
- ⑤中学校での辞書の取り扱い方について
- ⑥中・高の英語教員における単語に関する捉え方
- ⑦自己教育力の育成という観点からみた辞書使用の捉え方

次に、中学校・高校の英語教員が、これらの観点に対してどのように捉えているのかを詳しくみるために、表で表した。

また、表の中にまとめているものは、高校英語教員は授業の中で辞書を活用することについて書かれており、直接、辞書に言及している。

一方、中学校英語教員は授業の中で、辞書を使用することを前提としていないので、辞書には直接、言及していないのである。しかし、例えば、辞書指導で分析していった結果、事例や指導点などがあげられているため、そういった点について留意しながら述べていくこととする。内容としては、異質なもののように見えるが、分析の観点を重視した結果、あげられているものを踏まえて分析していった。

中・高の英語授業におけるカリキュラムの違い

中学校英語教員は授業の中で、辞書を活用しない理由として「週三時間で時間がない」、「時間に制限がある」など、「時間がない」といったコメントが多くあげられていた。

また、中学校英語教員は、「時間がない」という理由に、限られた時間の中で教科書の範囲を進まなければならないことや、英語の授業の中で4技能（読む・聞く・話す・書く）を身につけなければならない、ということも挙げていた。

表2 中・高の英語授業におけるカリキュラムの違い

高校	中学校
<p>時間がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校によりけりだが、1年生のときは、週5時間か6時間。選択の時間に、英語を取ろうと思ったら、週7時間とれる。(C) 	<p>時間がない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・週3時間で時間がない。(G) ・週4時間のときは、やっていたが、週3時間では無理である。(J) ・時間の制限がある。(I)
	<p>教科書の内容を限られた時間の中で到達すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生の段階では、ほとんど限られた範囲のものを限られた時間の中で、どれだけ達成できるかというのを生徒に求められている。(G)
<p>各科目によって授業内容が異なる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合英語（英語Ⅰ・英語Ⅱ）・リーディング・ライティング・オーラルコミュニケーションⅠ・Ⅱによって、生徒に身につけさせたいものが違ってくる。(D) 	<p>4技能（読む、聞く、話す、書く）を含む授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の中で辞書を活用することはない。それ以外にやらなければならないことがある。 ・授業の中では、読む、聞く、話

	す、書く活動を含んでいる授業 なので、単語を調べるだけとい うのは、やらない。(H)
--	--

高校英語教員は、英語の各科目（リーディングやライティングなど）によって授業内容が異なり、授業時間も十分確保できていると述べていることから、授業の中で生徒に辞書を活用させることが可能ではないかと考えられる。

中・高の英語授業において求められているもの

このように、中学校と高校においてカリキュラムの違いが見受けられた。では、中・高の英語授業において、どのようなことが求められているのであろうか。

中学校英語教員は授業の中で、話すこと・聞くことを重視していることが分かった。つまり、授業の中でコミュニケーション活動が多くなっているということが推察される。

表3 中・高の英語授業において求められているもの

高校	中学校
<p>読解力をつける</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の意に沿わないが、大学入試めがけて、読解力をつけさせることが大切である。(E) 	<p>話すことや聞くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> 何が一番大事かっていうと、根本的には使わないと声にださないと思っているので、理解するだけではだめ。(M)
<p>読解力をつける上で語彙数を増やすことが大切</p> <ul style="list-style-type: none"> 辞書を引くことによって、語彙数を増やすことができ、それが読解力や、英語の力を育成することに繋がる。(D) 	<p>コミュニケーション活動の重視</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業では、話すということを評価できたりする唯一の場なんで、聞く・話すは授業でなるべくやるようにしている。(G)

辞書は欠かせない

- ・語学になってくると、ネイティブが常にそばにいるわけではない。(A)
- ・聞きたいことを聞くと全部情報が載っていて、全部教えてくれる。(辞書＝学校の先生)(A)
- ・先生と辞書をうまく使って勉強することが高校では大事である。(A)

一方、高校英語教員は授業の中で、大学入試に向けて、読解力をつけさせることが大切であることをあげていた。また、辞書を引くことによって、語彙を増やすことができ、読解力の育成に繋がると述べていた。さらに、読むこと・書くことを中心に、辞書を上手く使って、自立して学習ができるといった必要不可欠な道具として考えているからではないだろうか。

中・高の英語授業の中で生徒の興味・関心を何に求めるか

中学校英語教員は、授業の中で話すこと・聞くことを中心に、コミュニケーション活動を行っているのに対し、高校英語教員は、読むこと・書くことを重視していたことが分かった。それでは、中・高の英語教員は、授業の中で生徒の興味・関心を何に求め、またそれが、辞書の使用にどのように関わっているかについてみていくこととする。

高校英語教員は、簡単な単語でもさまざまな意味があることを説明することで、生徒に「この単語には、こういう意味があったのか！」という「発見した喜び」を感じさせることによって、単語についての興味が広がるのではないかと考えていた。そのように、生徒が辞書を有効に使い、「発見した喜び」を積み重ねていくことによって、語彙力をつけていくのではないかと考えているようであった。よって、高校

英語教員は授業の中で、単に文章の意味を理解させるためだけに、辞書を活用していないことが分かった。

表4 中・高の英語授業の中で生徒の興味・関心を何に求めるか

高校	中学校
<p>発見した喜び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 熟語でも普通のちよつと違った意味を知ることによって、生徒が「ああ、ほんまや」、「そうなんかー」って言ったりするから。(C) <p>単語についての説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新出単語が出たから、引けというのではなく、単語にはこういう意味があると説明するときを使う。(C) <p>単語についての興味が広がる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 単語についての興味が広がる。(D) <p>語彙力がつく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 語彙の範囲が広がる。(E) 	<p>聞き取れたり、話せたりする喜び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 聞くことや話すことで、英語がちよつとでも聞けたり、ちよつとでも話せて楽しいなあっていう風に思ってくれたらうれしい。(F) <p>自分の表現で相手に伝えることが大事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 単語の訳を知っているからマルではない。(知らない単語でも自分で相手に伝えることが大事)(M)

また、中学校英語教員は授業の中で、語彙についての広がりや単語についての興味を持つことなどよりも、英語を聞いて「分かった!」、英語を話して「通じた!」という点に、興味や関心をおいていることが分かった。それも、自分の限られた語彙を使って、話したり、聞いたりすることを目指しているのであり、重要なことは、もっと基本的な英語を聞き取れたり・話したりすることに目を向けていることが見受けられる。

中・高における辞書使用と授業形態の整合性

中学校英語教員は、授業の中で生徒に、聞き取れたり・話せたりする喜びに興味・関心をおいていたことが分かった。また、それが授業の中で辞書を活用していないことにどのように関わっているかについてみていくこととする。

高校英語教員は授業の中で、大学入試をめざした読解力をつけさせるため、例えば、速読などのテクニックをとり入れた、一定の時間に英文を読んで理解させることを述べていた。このため、高校の授業の中では、必然的に辞書を引くという状況がでてくるのではないだろうか。したがって、授業の中において辞書を使用することは、授業形態に合うのではないかと考えられる。

表5 中・高における辞書使用と授業形態の整合性

高校	中学校
<p>授業の形態にあう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学入試に対応するための読解力をつけようと思うと、文法もある程度、詰め込み方式で教えたりとか読解力にしても、ある程度の文を短時間のうちに読ましたりとか、速読とか、いろんなテクニックを使っている。(A) 	<p>授業形態にあわない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1個調べている間に、3人の子どもが同じ例文で話すことができる。(M) ・対話形式では、辞書を使わなくてもいい形になっている。(M)
<p>活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語IにしてもIIにしても中学校のように非常に狭い範囲を題材にして、いろんな活動をグループに分かれて活動しだすと、時間がとられて進まない。(D) 	<p>活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動の中では、インタビューとかインフォメーションギャップとかの活動をしている。(H) ・单元ごとによるが、できるだけ楽しくなるようなゲーム的な要素を取り入れたりとか、インフォメーションギャップのような活動をし

	ていました。(G)
--	-----------

一方、中学校英語教員は授業の中で、インタビューやインフォメーションギャップなど、コミュニケーションをとり入れた活動を行っているとして述べており、中学校英語教員は授業の中で、できるだけ楽しくなるようなゲーム的な要素を取り入れた対話活動をしていることが分かった。

また、中学校英語教員は、ALTやJETとのチームティーチングを組んで、授業を行っているという意見があげられた。例えば、中学校英語教員は、以下のように述べている。

- ・「週三時間全部TTでやっている。教科書の内容が対話形式でほとんどなっているので、それに合わせて会話場面を設定している」(F)
- ・「日本人同士でチームティーチングをやって、モデルを会話でデモストレーションしながらする」(I)
- ・「先生同士がモデルを工夫して、それで導入して、意味を周知させて、こういうことをやるんだらうなということを理解させる」(L)

すなわち、中学校英語教員が、ALTやJETとのチームティーチングを組んだときには、一般的に、聞くこと・話すことが重視され、それによって、生徒に英語を分からせていると述べている。

さらに、中学校英語教員は、辞書を使用し、単語を1個調べるより、習った例文で話すことが大切であるという意見をあげていた。よって、中学校英語教員が辞書を活用することは、授業形態に合わないのではないかと考えられる。

中学校での辞書の取り扱いについて

今までみてきたように，中学校英語教員は授業の中で，辞書を使っていないことが見受けられた。そのことについて，中学校英語教員，高校英語教員は，どのように思っているのでしょうか。

中学校英語教員から，授業の限られた時間の中で，辞書で単語を調べることは，時間がかかるといった意見があげられた。このように中学校英語教員は，授業の中で辞書を使った学習を重視していないことが分かった。

表 6 中学校での辞書の取り扱いについて

高校	中学校
<p>辞書を使用した経験が少ない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高校に行ってから，1つの単語を引くだけでも，1分以上かかっている子がほとんどなので，中学からやってくれたら助かる。(A) 	<p>生徒が辞書で単語を引いて調べる時間がかかる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 時間がかかるから。(F) ・ 調べている時間をもったいない。(M)

一方，そのことについて高校英語教員は，1つの単語を探し出すことに，1分以上かかるという現状を指摘しており，中学から辞書活用をやってくれたら助かるという意見を挙げている。

言い換えれば，中学校で，辞書を引くことや使い方などに慣れていないため，高校英語教員は生徒が辞書を引くのに時間がかかるといった意見を述べたのではないかと考えられる。

中・高の英語教員における単語に関する捉え方

このようにみていくと、中学校英語教員と高校英語教員が辞書に対する捉え方が違うのは、単語そのものに関する捉え方が違っているのではないかと思われる。そこで、単語の捉え方についてみていくこととする。

中学校英語教員は、辞書を活用しない理由として中学校で習う単語は、一語一義であり、また、ジェスチャーや視覚的に示すことによって、単語を理解させることができるからであると述べている。

表7 中・高の英語教員における単語に関する捉え方

高校	中学校
<p>一語多義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・複数の単語の意味があるときに、使い方によって違うときに引かす。(Y3) ・簡単な単語でも難しい意味を持っていることがあるから。(M) 	<p>一語一義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校の単語は、1つの単語に、1, 2の意味しかない。(H) ・1つの単語にたくさん意味があることもないから。(T) <p>必要な単語の量が限られている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生段階は、必要な単語の量が限られている。(M) <p>ジェスチャーや図解などで理解できる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校段階は、ジェスチャーや物とかで単語じたいが理解できる。(A) ・単語の意味を調べるよりは、英語を使いながら子どもに示して、視覚的や耳から入って理解できるから。(A)

語感が身に付く	・ 語感が身につくとつかつかないとかは、辞書の使用による。(Y)
----------------	----------------------------------

一方、高校英語教員は、簡単な単語でも難しい意味をもっている指摘している。これは、高校英語教員が、生徒に簡単な単語でも難しい意味があることを説明することによって、1つの単語についてその語が由来する文化的な背景や文脈の中での使われ方が理解されるということについて目を向けていると考えられる。また、そのことは、高校英語教員が、辞書を引くことによって、語感が身につくという意見を述べたことに繋がるのではないかと思われる。

このことから、中学校英語教員が語彙学習に関しては、単語を、文脈の中で意味が異なってくるものではなく、語義と一対一対応をするものとして考えているのではないだろうか。

また、そのことについて、中学校英語教員は、教科書そのものについての意見を挙げていた。

- ・ 中学校の教科書は、単語の量が少ないし、英文が短い。(I)
- ・ 中学校の教科書は、辞書を引かなくてもいい形になっている。(K)
- ・ 中学校の教科書は、絵を見せて、ちょっと言い換えると本文の内容の理解ができる。(F)

このように、中学校の教科書そのものが辞書を引かなくてもいい形になっているため、授業の中で辞書を活用する必要はないと述べている。さらに、中学校英語教員は、辞書を活用しない理由として「教科書の巻末リスト」などの意見が多くあげられた。例えば、中学校H英語教諭は、「教科書の後ろにある巻末リストを使うなって言うほうが、難しいと思います。後ろにあるとすごく便利なので。」と述べている。すなわち、中学校の教科書そのものが辞書の使用を前提としてつくら

れていないことがわかる。

一方、高校英語教員は、教科書の内容についてのコメントは述べておらず、辞書を活用する理由としては関係していないことが分かった。

自己教育力の育成という観点からみた辞書使用の捉え方

高校英語教員は、辞書を活用する理由として、以下のようなコメントが挙げられた。

「基本的に自分で調べる上で使えばいいと思う。辞書っていうのはね、(中略)先生から引きなさいとか調べてない時、例えば単語の意味をあててね、こう引きなさいとか言って調べる場合もあるんですけど、やっぱり自分でこう分からなかったら、すぐ調べるとかね、そういう習慣がつけられればいいなあと。」

すなわち、高校英語教員は、生徒が英語を学習する上で、辞書を引くという習慣が身につくことによって、自分でわからないものに遭遇したときに辞書を活かすことができると捉えていることが分かった。

したがって、高校英語教員は、英語の学習に限ったものではなく、自分の興味・関心にそった発展的な学習をすることができると捉えており、自ら学ぶ方法を身につけることとして、辞書の使用を見ているのである。

表8 自己教育力の育成という観点からみた辞書使用の捉え方

高校	中学校
授業 <ul style="list-style-type: none">・ 自分で分からなかったら、すぐ調べるという習慣がつけられればいい。(B)・ 語学っていうのは、非常に個人的な部分が大きくなっていくから。(A)	家庭学習 <ul style="list-style-type: none">・ 授業の中で辞書を使うことよりもなるべく家庭の中で。(I)・ 1年生では辞書指導をするが、2、3年になってくると家庭学習。(I)

一方、中学校英語教員は、辞書を活用することを家庭学習においていると述べていた。これは、中学校英語教員が授業の中で、コミュニ

ケーションを重視しているため、辞書を予習において使用するものとみなしているのではないかと考えられる。よって、中学校英語教員の意見から、授業の中での辞書使用をあまり重視していないのではないかと考えられる。

また、中・高の英語教員が外国語を学ぶ意義についてどのように考えているかを質問したところ、「視野が広がる」、「違った視点で物事を考えることができる」、「自文化理解につながる」などの3つの観点から述べており、共通の捉え方をしていることが分かった。

しかし、中学校・高校英語教員は、授業の中で辞書を使った学習の捉え方については、異なる態度を示した。

インタビューから、中学校英語教員は、辞書の構造や辞書の役割について理解しているにもかかわらず、授業の中では活用していないことが分かった。これは、中学校英語教員は、語彙学習において、単語を、文脈の中で意味が異なってくるものではなく、語義と一対一対応をするものとして、それぞれを切り離して考えているため、授業の中で辞書を使った学習をしないのではないかと考えられる。

3. 考察

ここでは、中学校英語教員が授業の中で辞書を使った学習をどのように捉えているかについてみるために、中学校英語教員とともに比較対象として高校英語教員にもインタビューを行った。その結果、中学校・高校の英語教員は、外国語を学ぶ意義について、同じように捉えているが、授業の中で辞書を使った学習の捉え方については異なる態度を示した。

インタビューから、高校英語教員は授業の中で、辞書を活用していることが見受けられた。その大きな理由の一つとして、高校では、大学入試に向けて、読解力をつけることを重視していることが挙げられており、高校英語教員は、辞書を引くことを必要不可欠であると捉えているように思われた。

しかし、さらにその理由を分析していった結果、辞書の活用に広い

意義を見出しているようであった。例えば、「簡単な単語でも難しい意味をもつことを知ることで、単語の理解が深まる」といったコメントに見られるように、1つの単語についての文化的な背景や文脈の中の単語の使われ方がどのようになっているかなどに目を向けていることが分かった。

また、「自分で分からなかったら調べる習慣がつくのではないか」など、生徒が英語を学習する上で、辞書を引くという習慣が身につくことによって、自分で分からないものに遭遇したときに辞書を活かすことができることにつながると捉えていることが分かった。これは英語の学習に限ったものではなく、自ら学ぶ方法を身に付けることとして、辞書の使用を見ているのである。

しかし、中学校英語教員は、理念として授業の中で辞書を活用しなければならないと感じながらも、実際には活用していないことが見受けられた。インタビューから中学校英語教員の意見を詳しく分析すると、「週3時間の授業時数の中で4技能（読む・聞く・話す・書く）を身につけなければならないこと」、「限られた時間の中で教科書の範囲を進まなければならないこと」、「中学校で習う単語が難しくないこと」、「授業の中でコミュニケーションを重視していること」、「中学校の教科書の内容が簡単なこと」、などのさまざまなものが背景にあるため、授業の中で辞書を使った活動を重視していないことが分かった。これは、中学校英語教員が、英語を学習する上で、辞書は単語の一義的な意味を調べるための補助的な道具であるとしか捉えていないからではないだろうか。また単語を、文脈の中で意味が異なってくるものとしてではなく、語義と一対一対応をするものとして、それぞれ切り離して考えているため、授業の中で辞書を使った学習をしないのではないかと考えられる。

中学校の学習指導要領－外国語編－では、実践的なコミュニケーションを重視する中で辞書を積極的に活用することをうたっている。したがって、中学校英語教員は、授業の中でコミュニケーションを重視している中でも、辞書を使った学習を考えていくべきではないかと思

われる。理念として授業の中で辞書を活用しなければならないと感じているなら、少しでも授業の中に辞書を探り入れていくことにより、中学校の初期段階から生徒に辞書の構造や学習の道具として辞書を活かすことなどについて気づかせることができるのではないだろうか。

これまで、教師側からみた辞書活用の意義や、辞書指導の捉え方についてみることができた。しかし、インタビューや先行研究などからは、生徒側が辞書を使うということをどのように捉えているかについては明らかになっていない。

そこで、第4章では、生徒が辞書をどのように捉えているかについて調査することとした。

第4章 辞書に関する中学生のとらえ方

第1節 研究目的

現状として、生徒が辞書をどのように使用しているかを調査する。また、生徒が辞書の仕組みを知ることによって、単語の理解を深め、辞書を活用しようとするのではないかと考え、「辞書づくり」という単元を設定し、授業実践を行い、生徒が辞書をどのように捉えたかを調査することとする。

第2節 研究方法・対象

研究対象は、兵庫県F中学校1年生86名とした。授業は、2005年7月に実施し、JETの協力を得て、実践することとした。はじめに、辞書使用に関するアンケート調査を行った。調査項目は、以下の通りである。

- ① あなたは、英語が好きですか？
- ② あなたは、英語を学習する上で、辞書を使いますか？
- ③ あなたは、新出単語を調べる時、どのようにして調べますか？
- ④ あなたは、どのような場面で辞書を調べますか？
- ⑤ あなたは、辞書を引くことが楽しいですか？

次に、「辞書づくり」という単元を設定し、授業実践を行った後、授業への評価並びに、自由記述のアンケート調査を行った。調査項目については、以下の通りである。

- ① あなたは、辞書づくりをしてどのようなことに気づきましたか？
- ② あなたは辞書を引くことが楽しくなりましたか？

また、選んだ理由を書いてください。

- ③ あなたは、今回の活動を通して、辞書を以前より身近に感じましたか？
- ④ 今回の辞書づくりを通して感想や意見を書いてください。

1. 授業で用いた教材

各自が使用している辞書を用いた。

2. 「辞書づくり」について

辞書には、単語のさまざまな意味や発音の仕方、どのような単語と連語を成すか、どのような場面で使うことができるか等の情報が含まれている。また、実際に辞書を引いて、参照しながら、辞書の仕組みを理解することができると考えられる。

「辞書づくり」は、後で、調べた単語の意味やその他の情報を書き足していけるように、各自が保存できる形で紙に書いていくこととした。辞書を参照しながら、例文などを自分で考え、絵などを描いて工夫していく。「単語帳」と「辞書づくり」の違いとしては、「単語帳」は、単語を覚えるための一つの方法として書き写していくことであるが、「辞書づくり」は、辞書にはどのようなことが書いてあるかという辞書の見方を知ることができる。

また、「辞書づくり」というと、辞書の膨大な項目を作成すると感じてしまうが、辞書の仕組みを認識させることが目的である。

そこで、辞書に慣れ親しむために、自分専用の辞書をつくるという「辞書づくり」の活動を取り入れることとする。

3. 授業のねらい

生徒が辞書の仕組みを知ることによって、単語の理解を深め、辞書を活用するのではないかと考え、以下の3点に授業のねらいをおくこととした。

- (1) 辞書を参照しながら、自分たちの辞書を作る。
- (2) 辞書の仕組み（意味・例文・品詞・発音・熟語など）を知ることができる。
- (3) 辞書に慣れ親しむ。

4. 授業計画

授業は、全3時間、以下の通りで実践を行った。

第1次 教科書の単語で「辞書づくり」をしよう。(45分)

第2次 自分の興味ある単語で「辞書づくり」をしよう。(50分)

第3次 自分の辞書を完成し、紹介しよう。(15分)

□ 第1回目 教科書の単語で「辞書づくり」をしよう。

はじめに、身の回りの単語を用いて、辞書を引くように指導する。また、身近によく使う単語には、複数の意味があるということを例にとりあげ、生徒の興味を引かす。

次に、辞書には、たくさんの情報が書かれているが、教科書の巻末リストには、1, 2個の意味でしか、書かれていないことを説明する。

また、「辞書づくり」について、ある程度の例を示しながら、説明を行う。辞書に書かれている情報を自分なりに工夫をして、まとめる作業をしていく。各自が現在、習っている範囲の新出単語で、「辞書づくり」を行う。

□ 第2回目 自分の興味ある単語で「辞書づくり」をしよう。

自分の興味ある単語や調べたい単語についての「辞書づくり」を行う。

□ 第3回目 自分の辞書を完成し、紹介しよう。

クラス全員分の、各自が興味ある単語で「辞書づくり」をしたものを紙面上に示し、なぜ、興味をもったのかを生徒に聞く。

第3節 結果

1. 辞書使用に関するアンケート調査

辞書使用に関するアンケート調査から以下のような結果が明らかになった。

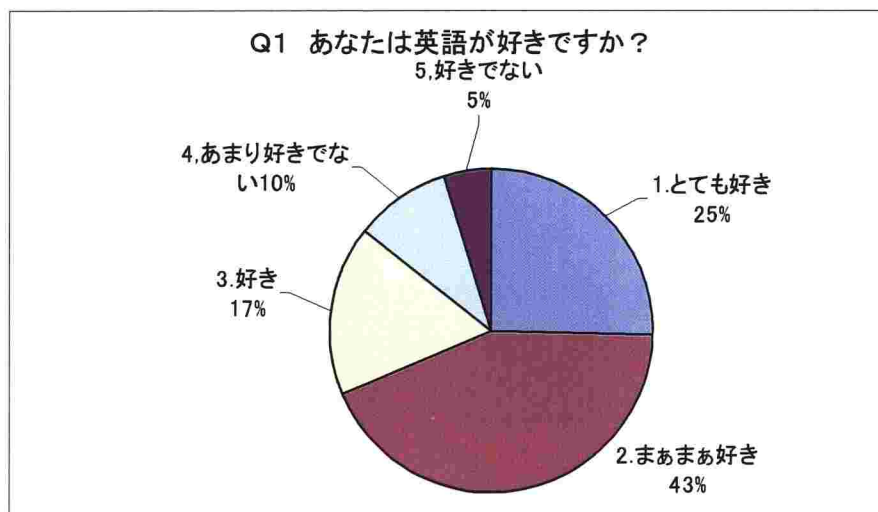


図2 あなたは英語が好きですか？

「あなたは英語が好きですか？」という問いに対し、とても好き25%、まあまあ好き43%、好き17%、あまり好きでない10%、好きでない5%という結果であった。(図2)

「英語が好き」と回答する者が全体の85%を占めていた。この結果から、兵庫県F中学校では、入門期の英語に対する興味・関心が高いものであると推察される。

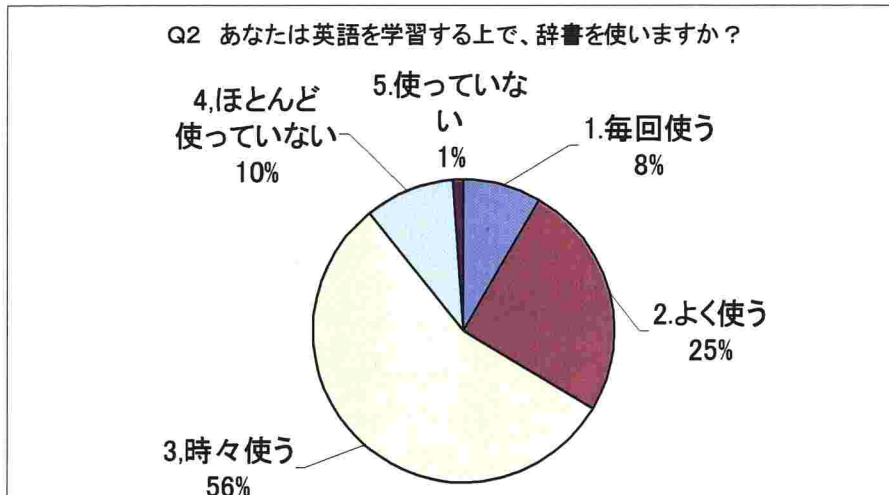


図3 あなたは英語を学習する上で、辞書を使いますか？

「あなたは英語を学習する上で、辞書を使いますか？」という問いに対し、毎回使う8%、よく使う25%、時々使う56%、ほとんど使っていない10%、使っていない1%という結果であった。(図3)

生徒は、英語を学習する上で、全体の89%が辞書を使用していることが分かった。

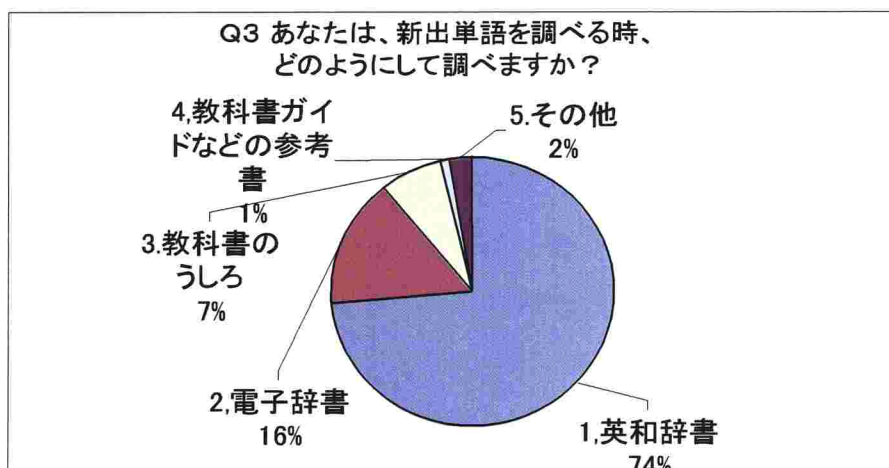


図4 あなたは、新出単語を調べる時、どのようにして調べますか？

「あなたは、新出単語を調べる時、どのようにして調べますか？」という問いに対し、英和辞書74%、電子辞書16%、教科書のうしろ

る7%、教科書ガイドなどの参考書1%、その他2%という結果であった。(図4)

先行研究や第三章の中学校英語教員のインタビューでは、授業の中で辞書を活用しない理由の1つとして、「教科書の巻末リスト」の問題が挙げられていた。そのため、生徒は、新出単語を調べる際、「教科書の巻末リスト」を利用するのではないかと予想していたが、電子辞書を含めた90%の生徒が辞書を用いていることが分かった。

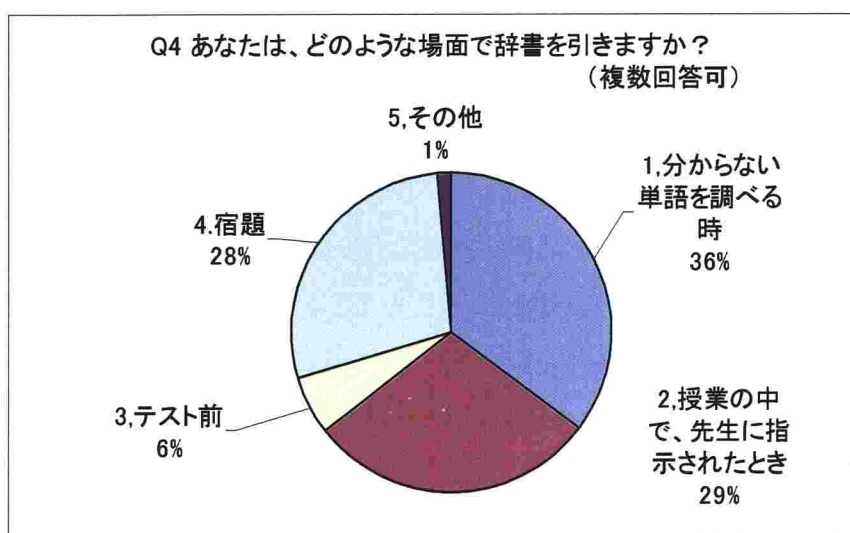


図5 あなたは、どのような場面で辞書を引きますか？

「あなたは、どのような場面で辞書を引きますか？」という問いに対し、分からない単語を調べるとき36%、授業の中で先生に指示されたとき29%、テスト前6%、宿題28%、その他1%という結果であった。(図5)

生徒は、分からない単語を調べる時に辞書を引いていることが分かった。また、宿題においても辞書を引いている生徒がいることが見受けられた。

以上の辞書使用に関するアンケート調査を行った結果、生徒は英語の学習において辞書を使用していることが明らかになった。これは、JETが4月から5月にかけての授業の中で、辞書を習慣的に活用し

ていたことが、アンケート結果に関係していたのではないかと考えられる。

しかし、アンケート調査からは、生徒は、辞書を引いて調べるとき、例えば、単語の意味だけを確認しているのか、また、例文や熟語などを詳しくみているのかなど、どのような見方をして調べているのかを明らかにすることはできなかった。

そこで、「辞書づくり」という単元を設定し、授業実践を行った後、辞書使用に関するアンケート調査を実施した。また、辞書づくりの生徒の様子や、アンケート調査などを踏まえて、生徒が辞書をどのような捉えかについて詳しくみていくこととした。

2. 「辞書づくり」の授業の様子

活動内容について

1回目 教科書の単語で「辞書づくり」をしよう。

授業の導入として、ローソンやファミリーマートなどのロゴマークをラミネートしたものに、別の紙で隠しながら、「What's this?」と生徒に示しながら、徐々に何が描いてあるのかヒントを与えて、ゲーム感覚で生徒たちに答えさせた。生徒たちは、一生懸命になって、「あっ、ローソンやん!!」「あのマーク、絶対ファミマやし!!」など声をあげて答えていた。

このように、生徒の身の回りにあるローソンやファミリーマートなどを例にあげて、なぜそれらが「コンビニ」と呼ぶのかについて質問したところ、生徒は分からない様子であった。また、生徒は英語で「コンビニ」をどう表すのかについても、分からなかった。このことから、生徒は、普段よく「コンビニ」という言葉をよく耳にして使用していたが、その意味を知らないで使っていたことが分かった。

また、英語で「convenience store」ということを教えながら、辞書を一齐に引かすと、convenience という単語がなかなか見つからず何度も同じページをいったりきたりしながら、探していた。単語が見つかり、とっさに「便利!」「好都合な!」という辞書に書いてある

意味を次々に読み上げ声に出していた。また、単語を見つけた生徒は、まだ単語が見つからない生徒にどこに書いてあるかを教えていた。

次に、「book」という単語は、本という意味だけではなく、例文などを示して、本では意味が当てはまらないということに気づかせ、辞書を引かした。生徒は、「book」という単語の意味は、本だけであると思っていたが、名詞以外に予約するという動詞の使い方があることに、生徒は、「えっ！？本以外に単語の意味があるんや！」「予約っていう意味があるなんて知らなかった！！」と驚き、関心をしていた様子であった。

このように具体的な例を示し、生徒に、教科書以外の普段引いたことのない単語を辞書で引く場面を与えた。また、教科書の巻末リストなどには、一語一義しか意味が載っていないが、辞書にはたくさん載っているということを説明し、辞書にはどのようなことが書かれているかを知るためにも「辞書づくり」という自分で辞書から情報を抜き出して、自分で絵などを描いていきながら、その単語について詳しく調べていくことをある程度例で示しながら、教示した。

まず、「辞書づくり」がどのようなものであるかを理解してもらうために、現在習っている教科書の新出単語から行っていくこととした。

生徒は、初めのうちは、どのように作っているのか分からない様子であったが、教科書の新出単語を辞書で引き、書いていくうちに次第に理解していく様子が伺えた。

2回目 自分の興味ある単語で辞書づくりをしよう。

次は、自分の興味ある単語、好きな単語、普段身の回りにある英語で調べたい単語、などを辞書で引き、それについて「辞書づくり」していくことを説明した。また、なぜその単語を選んだのかについての理由も書くこととした。

生徒は、それぞれ好きな単語を選び、絵などを描いて工夫しながら、色鉛筆などを用い「辞書づくり」をした。生徒は、自分の好きなものや知りたい単語であったことから、自分の「辞書」をつくるのに集中し、皆夢中になって作っていた。例えば、テニス (tennis) という単

語を選んだ生徒は、「テニスクラブに入っていて、テニスをするのが好きだから」という理由であった。ラケットの絵を描いてあり、ラケットについても詳しく説明を書いていた。また、打ち方などについても詳しく説明してあり、自分の辞書に書き加えていた。

また、例文についても辞書からそのまま写すのではなく、自分で例文などを考え、熟語などについても調べている生徒がいた。

3回目 自分の辞書を完成し、紹介しよう。

2回目に生徒たちが、自分の興味ある単語で「辞書づくり」をしたものを、クラスで1つにし、文集のようにしてまとめた。このようにして、クラスの生徒がどのようなものを作っていたのかをみることができた。

それぞれ書き方が異なっており、それぞれ選んだ単語が違って個性がでていた。また、単語の意味だけではなく、品詞・例文・熟語などが書かれていた。

それぞれ生徒は、自分が作ったものを発表していき、「辞書づくり」の感想を聞いていくと、「自分で考えてつくるのは、楽しいことだった。辞書を2冊ほど活用すれば、それぞれ少し違ったまとめかたがされており、役立った。自分で作ればよく覚えられるなあと思った」、「その単語の使い方が分かった！ペンをいろいろ使うと分かりやすくなり、楽しくなった。ノートに書くよりも、こっちの方が意欲がでた」などの意見があげられた。

また、JETの先生からは、「生徒たちは、この活動についてどのような反応をするのかと思っていましたが、日頃と違う活動をして、生徒たちがこんなに反応するのは、思いませんでした。また、辞書は、生徒にとって改めて重要であると気づき、この「辞書づくり」を続けていきたいと思います」といった意見があげられた。

3. 実践後のアンケート調査

実践後のアンケート調査から、以下のような結果が明らかになった。

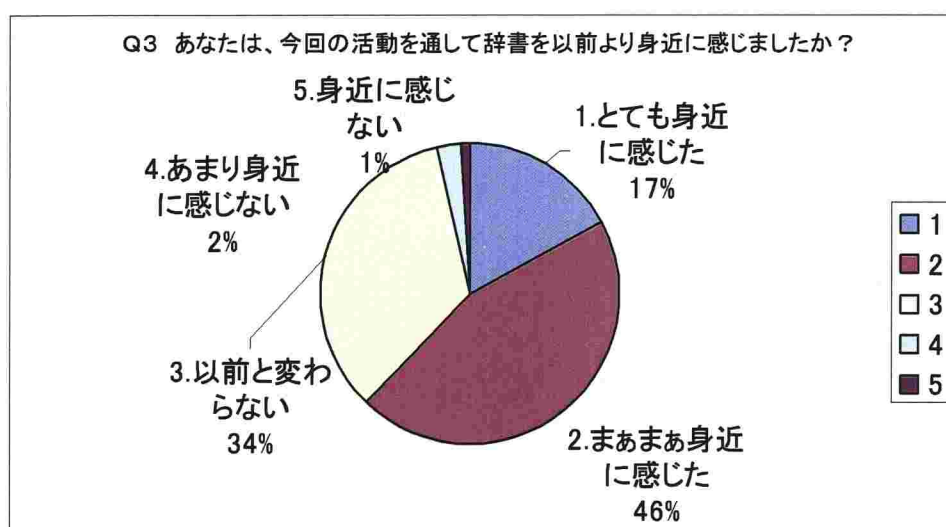


図6 あなたは、今回の活動を通して辞書を以前より身近に感じましたか？

「あなたは、今回の活動を通して、辞書を以前より身近に感じましたか？」という問いに対し、とても身近に感じた17%、まあまあ身近に感じた46%、以前と変わらない34%、あまり身近に感じない2%、身近に感じない1%という結果であった。(図6)

全体として、63%の生徒が辞書を身近に感じたということが分かった。

しかし、なぜ辞書使用のアンケート調査から、生徒は辞書を使用していた経験のあるものが多かったにもかかわらず、「以前より辞書を身近に感じた」という回答が多かったのであろうか。

授業を通して生徒が「身近に感じた」という意見の中に含まれる要素は何であったのかについて、さらに、実践後のアンケートの記述から詳しくみていくこととした。

4. 実践後のアンケート調査結果

はじめに、「あなたは、辞書づくりをしてどのようなことに気づきましたか。」という記述のアンケートの意見から、生徒が授業の活動において、辞書に対してどのように捉えたのかを調べることにした。

まず、生徒がそれぞれ書いた記述の文章から、どのような点に着目しているのかを分析していった。そこから、各記述に見られる意味のかたまりごとに分けていくと、**自分のものという意識（所有感）** **視覚的情報の優位性** **語彙数の多さの発見** **1つの言葉に対しての気づき** **技術的な向上** **学びの道具としての辞書**という、6つのカテゴリーに分類することができた。次に、6つのカテゴリーについて詳しく説明していくこととする。

自分のものという意識（所有感）

「辞書づくり」の活動においては、後で調べた単語の意味やその他の情報を書き足していけるように、各自が保存できる形にし、自分専用の辞書をつくることを目的としていた。その中で生徒たちは、自分で作った辞書のことを意識しつつも、自分以外の他者の「辞書づくり」について述べていることが分かった。生徒の意見としては「みんな作り方がそれぞれ違っていい（工夫のしかたとか）」、「例えば、〇〇君のやつでは、理由がすごくおもしろい。〇〇君の独自で考えていたのですごくよかった」などというものが見られた。これは友人たちが辞書づくりにおいて、それぞれの持ち味を活かしながらその生徒なりのもので作り上げていることに気づいているのである。

また、生徒は自分でつくるから、覚えることができる、おもしろいと述べていた。このことについては、「自分で作るから、工夫しようとするし、いろいろな例題もかくことで、覚えやすいと思った」、「自分なりの辞書ということで、作るのがおもしろい」などの意見を述べていた。自らが作業をすることによって、単語そのものを記憶する助けとなる、という実感を生徒たちは持っているのである。それは、いわゆる思い入れというような特別な感情を伴うものであり、単語につ

いて書き込んだ内容をより強固に記憶することにつながっているといえる。

このことから、生徒一人ひとりに同じ教材を与えているが、生徒は、自分のもの（所有感）であるため、工夫をして、おもしろいと感じるのではないかと考えられる。

視覚的情報の優位性

生徒たちは、自分たちの「辞書」に、絵などの視覚的情報を付加することが有効であると気づいていた。これについては、「自分の選んだ単語に関係する言葉や絵を加えていけば、よりわかりやすくなる」、「絵をいれてかくとどんなスポーツかなどがわかることに気づいた。とても大事な所は色をつかうなどすると分かりやすくなった」、「辞書に絵がかいてあったら分かりやすい」などの記述から見ることができる。生徒は、自分たちの「辞書」に文字情報ばかりでなく、絵などの視覚情報を加えることによって、より分かりやすくしようと工夫していた。また文字であっても、色を使用することによって、例えば例文の中の鍵となる部分を強調したりすることで、学習がより効果的に行われるようになると考えていた。さらに、こういった創意工夫を取り入れる背景には、それぞれが自分のもの（所有感）であるという意識を持っていることが関係していたのではないかと考えられる。

語彙数の多さの発見

生徒たちは、辞書を引くと教科書では習ったことのない単語数の多さを発見したことについて述べていた。生徒の意見からは、「単語は中1で習うものがすべてでなく、すこし辞書をひらくといろんな発見があった」、「自分が知っているものなんて、ほんのちよっとじゃないか！！という驚き」、「おもしろいのも、けっこうのっているということに気づいた」などというものが挙げられた。生徒は、自分の知っているものがほんの限られたものでしかないことに気づいたことが分かった。

これは、生徒が改めて辞書をたくさん引く機会を持つことにより、語彙の多さに気づいたといえる。また、紙の辞書の特徴である一覧性という特徴が、このような意見に繋がったのではないかと考えられる。

一語一義から一語多義への広がり

生徒たちは、1つの言葉に対して意味が複数あるということについて述べていた。このことについては、「1つの単語で2つ以上くらいの意味があって使い方は、数えてもきりが無い位あること!」、「単語は意味が1つだけじゃなくて、何個かある。使い方によって単語の意味も変わると思った」などの意見を述べていた。生徒は、教科書の巻末リストなどによって、1つの単語には1つの意味しかないと思っていたが、1つの単語で多くの意味をもつものがあることに気づいたことがわかる。

また、生徒たちは、1つの言葉に対して品詞がたくさんあることについても述べていた。生徒の意見としては、「言葉（単語）の中にも、動詞とか形容詞があり、1つの単語の中に2～3ぐらいの品詞名がある」、「動詞や名詞、形容詞など、たくさんの種類があり、組み合わせ方が大体決まっているということ」などというものが見られた。これは、1つの語のもつ文法的な側面について、品詞としての在り方を生徒が理解したことがわかる。

さらに、生徒たちは、1つの言葉についての意味や、品詞以外の辞書の機能について述べていた。これについては、「1つの言葉にはいろいろな意味があるんだなと思った。前までは、自分の知っている意味だけの部分だけで終えていたが、全体を見るようになった」、「ぼくは、だいたい電子辞書を利用していたが、辞書をつくることで1つの単語をくわしく調べることをして楽しさを感じた」、「辞書を見る時は、いつも、その単語の意味という所ばかりを見ていました。でも、この辞書作りでは、その単語を使った文などがよく見てみるとのっついていました。だから意味だけではなく、これからは文も見たいです」などの意見があげられた。生徒は、例文の中で、単語がどのような使わ

れ方をしているかを見ていき、適切な訳語をみつけることができることに気づいたといえる。

このように、生徒は1つの単語について、1個の意味だけでなく、複数の意味があり、品詞や例文などがどのように使われているかについて詳しく書かれていることに気づいていた。また、生徒は、これまで辞書を引くと、意味だけ調べていたことに気づき、品詞や例文などの他の辞書の機能をみていくことが重要であることが分かったと考えられる。

技術的な向上

生徒たちは、英語を学習する上で、辞書を使用していく頻度が増えるにつれて、辞書を引くことに慣れていったと述べていた。このことについては、「辞書はひく回数が増えると早くひけるようになる!」、
「たくさんひいていたら、たぶんだけど、ちょっとはやくひけるようになっていくと思う」、「なれるまでは時間がかかるけど、なれてきたら、前よりは、はやく辞書をひけるようになったと思う」などの意見を述べていた。生徒は、授業の中で、何回も辞書を引く体験を通して、早く引けるようになると実感したのである。これは、生徒が、辞書を使いこなすには、技術的な訓練を必要とすることに気づいたのではないかと考えられる。

学びの道具としての辞書

生徒たちは、英語を学習する上で、辞書はかかせないものであると述べていた。生徒の意見からは、「辞書を引くたのしさが増えた。辞書は手元にあると便利なものだと思った」、「辞書を使えば面倒なわりにイヤな宿題がすぐ終わるということ」、「やっぱり辞書は身近にあって役立つんだなと思いました。」などというものが見られた。生徒は、辞書を引くことを面倒なものと考えていたが、辞書を使用していく中で便利であると気づき、身近なものとして捉えた。これは、生徒が、英語を学習する上で辞書という道具を活用することが重要であると

気付いたのではないかと考えられる。

5. 考察

生徒は、辞書使用に関するアンケート調査から、英語を学習する上で辞書を活用していることが明らかになった。しかし、アンケートの調査からは、生徒は辞書を使用する際、どこまで詳しく調べているかの詳細については分からなかった。

そこで、「辞書づくり」という単元を設定し、辞書の仕組みを理解させることによって、生徒が辞書をどのように捉えたのかを、授業の様子や、実践後の記述のアンケートから分析することにした。

生徒たちは、アンケートの中で自分たちのこれまでの学習を振り返り、今まで辞書を引いたら単語の意味の確認だけに終わっていたことや、辞書の機能については、十分な理解をしていなかったことを反省していた。

また、生徒の記述を分析すると、「授業の内容に対しての気づき」「辞書の機能についての理解」「英語を学習する上での辞書を引く重要性への気づき」という3つの観点から捉えていたことが分かった。これは、事前に行われた辞書使用に関するアンケート調査からは、見えなかった部分である。

今回の辞書づくりを通しての感想や意見について、「以前は、辞書はなんだか難しいイメージがあったけれど、実際に、自分で作ってみて辞書は身近なものなんだと思いました。また、自分で作ったほうが身につきやすいと思いました。楽しかったです」、「これからも、辞書を積極的に活用したいと思った。単語のつづりや意味例文などが載っていることで、一つの単語にも深い所までせまっていけると思った」などの意見が述べられた。これは、授業を行う前までは、辞書を引くことが難しいというイメージを持っていたが、授業の中で、自分の「辞書づくり」をすることによって、辞書の機能を理解していく中で、便利だということに気づき、これからも辞書を活用しようと思えたのではないかと考えられる。このように、辞書の見方を知った生徒は、自己教育力を育成することにつながっていくのではないかと考えられる。

授業の中で自己教育力を育成することを根底に考えたとき、本来、生徒は、どのように学びを深めていくべきであるのか。

実践後の「辞書づくり」の授業を通して、生徒たちの3つの観点から捉えたものを図で示してみることにした。(図7)

まず、生徒は「辞書づくり」という活動そのものに対する教師の求めている目的に気づくのではないかと思われる。次に、活動そのものに対しての気づきから、辞書の仕組みなどを知って、辞書の見方を理解し、身につけることができていく。生徒は、授業のねらいを理解しているといえる。

さらに、こうした授業を踏まえて、辞書の機能を理解した上で、生徒は、辞書が便利だということに気づき、身近に感じることができるのではないかと考えられる。また、辞書を引くという習慣が身につくことによって、自分が英語を学習する上で、分からないものに遭遇したとき、辞書を活かしていくことができるということに気づいたのではないかと考えられる。

これらを踏まえて、自己教育力を育成することにつながるのではないかと考える。また、生徒たちの学びが表層的なものから、より深いものへと変化していくのではないかとと思われる。

以上のことから、少しの授業の間でもこういった活動をすることで、生徒は、さまざまな気づきをしたことが大切であり、英語教育の初期の段階でも、折に触れて辞書指導していくことによって、自己教育力を育成することに取り組んでいく必要があるのではないかと考えられる。

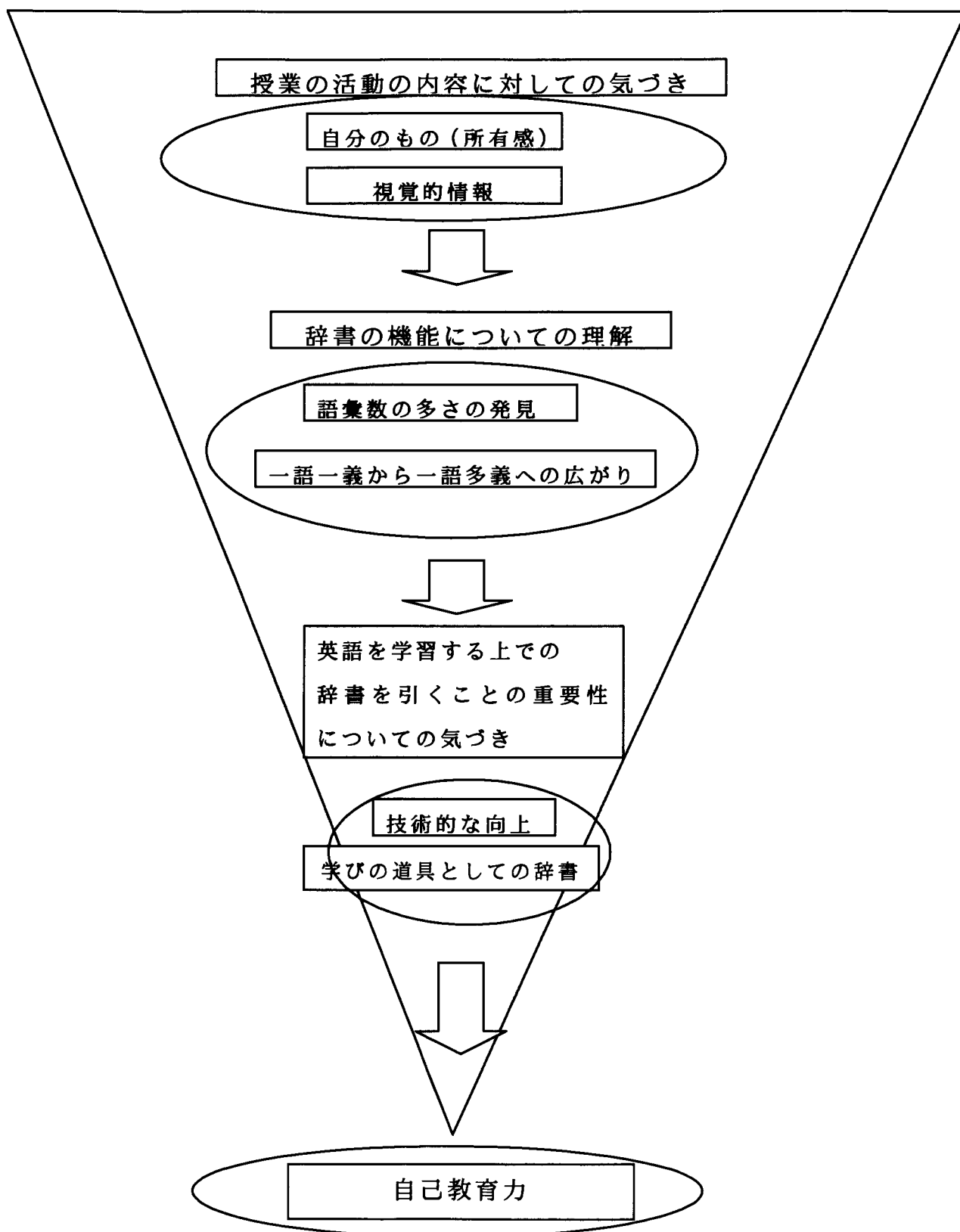


図7 辞書を引くことを通しての気づきと自己教育力への深まり

第5章 全体考察

これまでの研究Ⅰ・研究Ⅱを通して、教師側と生徒側が「辞書」を使った学習をどのように捉えているかについてみる事ができた。

まず、研究Ⅰにおいて、中学校英語教員が授業の中で辞書を使った学習をどのように捉えているかについてみるために、中学校英語教員とともに比較対照として高校英語教員にもインタビューを行った。

その結果、高校英語教員は、辞書を活用していたことが見受けられた。一方、中学校英語教員は、先行研究の辞書指導に関するアンケート調査などにみられたものと同様に、辞書を活用していないにもかかわらず、「辞書の重要性を教える必要がある」、「単語の理解が深まる」など、理念として辞書を活用しなければならいと感じていたことが見受けられた。

そこで、中学校英語教員がどのような考えに基づき、またその背景にある教育そのものに対する考え方をみていくために、中・高の英語教員にインタビューをした意見を詳しく分析した。その結果、中学校・高校の指導者のそれぞれ背景にあるものを知ることができた。

高校英語教員の背景にあるもの

高校英語教員は授業の中で、辞書を活用している理由として、大学入試をめざして読解力をつけることが大きく関連しているように思われた。しかし、高校英語教員の辞書を活用する意見を詳しく分析してみると、辞書を活用することに、広い意義を見出していることも明らかになった。

高校英語教員は、例えばインタビューの中で「簡単な単語でも難しい意味をもつことを知ることによって、単語の理解が深まる」などの意見があげられた。これは、辞書を引いて、単語の文化的な背景や、文脈の中でどのように単語が使われているかなどに目をむけていることが分かった。

また、インタビューの中で「自分で分からなかったら調べる習慣が

つくのではないか」などといった意見があげられた。これは、米山（2003）が、「授業中、随時辞書を参照させること自発的な習慣形成に役立つ（p.79）」と指摘している部分であり、英語を学習することによって、自分で分からないものに遭遇したときに、辞書を活かし、発展的な学習ができるのではないかと捉えていると思われる。

中学校英語教員の背景にあるもの

中学校では、実際辞書を活用していないにもかかわらず、理念として辞書を活用しなければならないと考えていた。

中学校英語教員にインタビューをした意見を詳しく分析すると、研究Ⅰの結果から、「週3時間の授業時数の中で4技能（読む・聞く・話す・書く）を身につけなければならないこと」、「限られた時間の中で教科書の範囲を進まなければならないこと」、「中学校で習う単語が難しいこと」、などのさまざまな事象が背景にあるため、授業の中で辞書を使った活動を重視していないことが分かった。

中学校英語教員は、英語を学習する上で、辞書は単語の一義的な意味を調べるための補助的な道具であるとしか捉えていないことが見受けられた。これは、第1章で述べた、これまでの学校教育での教科書などに書かれているものを単に覚えていくことと同様に、語彙学習において、単語を文脈の中で意味が異なってくるものとしてではなく、語義と一対一対応をするものとして、それぞれ切り離して考えているため、辞書を活用しないのではないかと考えられる。これは、Jeremy Harmer (2002)が、「辞書をうまく使えば、生徒はまさに自分が探しているものを手にいれることができるが、外国語で単語がどのように使われているのかが生徒に示されないことがあまりにも多く、実際は、はるかに複雑なことがらに対して単純な答えが与えられてしまう」と指摘している部分ではないだろうか。

これまで、教師側からみた辞書活用の意義や辞書指導の捉え方についてみることができた。次に、生徒側が辞書をどのように捉えているかについてみていくこととした。

研究Ⅱにおいては、中学生自身が辞書をどのように捉えているのかについて調べてみたところ、先行研究においては、行われていなかった。そこで、生徒が辞書をどのように使用しているかについて調査した結果、英語を学習する上で辞書を使用していることが分かった。しかし、第2章で述べた辞書の構造や役割について理解しているかなど、どこまで詳しく調べているかについてみることはできなかった。

そこで、「辞書づくり」という単元を設定し、辞書の仕組みを示すことによって、生徒が辞書をどのように理解したのかを実践後の授業の様子や記述アンケートから分析してみることにした。その結果、生徒たちは辞書を引くことを難しいとイメージとして捉えており、また、辞書の構造や辞書の役割については、十分な理解をしていなかったことが見受けられた。

実践後の生徒の記述を分析した結果、「授業の内容に対しての気づき」、「辞書の機能についての理解」、「英語を学習する上での辞書を引く重要性」という3つの観点から辞書を捉えていたことが分かった。例えば、「辞書の機能についての理解」という点において、生徒は、1つの言葉に対して意味が複数あるということ、1つの語のもつ文法的な側面について品詞としての在り方を理解したことなど、第2章で述べた辞書の構造についての部分に気づいていることが分かった。

また、「英語を学習する上での辞書を引く重要性」という点において、生徒は、辞書を使用していく中で、便利なものであると理解し、英語を学習する上で辞書という道具を活かすことが大切であるということに気づいていた。これは、高校英語教員が、辞書を活用することに、より広い意義を見出している部分に、生徒は気づいていると考えられる。

上記は、稲垣（2003）がいう、「知識を歴史の一本として捉え、生きた知識を獲得し、学びを広げていく」と述べている部分と相通じる部分のものがあるのではないだろうか。つまり、辞書の使用が単語の一語一義ではなく一語多義、すなわち、知識の再構成へとつながり、類義語、反意語などを調べることで表現の多様化を身につけ、については

生きた知識の獲得，自己教育力を育成することへと繋がっていくものと思われる。

本研究では，研究Ⅰ・研究Ⅱを通して，教師側と生徒側から「辞書」を使った学習についてどのように捉えているかについてみる事ができた。研究Ⅰのインタビューから，中学校英語教員は，授業の中で辞書を活用していないにもかかわらず，理念として辞書を活用しなければならないと捉えていることが見受けられた。

また，辞書は単語の一義的な意味を調べるための補助的な道具であるとしか捉えていないことが分かった。しかし，このように機械的に単語の意味を調べるためだけに，辞書を生徒に与えてしまうと，第2章の中で述べられていた，中学生にとっては，負担に感じるといった意見に繋がり，語彙についての広がりや単語についての興味をもつことができないと思われる。そのためには，もっと生徒自身に英語学習の中で辞書は活かせるということを伝えることによって，中学生にとって負担に感じないのではないだろうか。

したがって，指導者が中学生に辞書を活用させる際には，辞書の構造や辞書の役割などに気づかせるといったことを目標において，活動を行うことが重要である。また，指導者自身が授業の中での辞書の位置づけについて深く考えていくべきである。

理念として辞書を活用しなければならないと感じているのであれば，生徒は，中学校段階から辞書の構造や役割などに気づける力をもっているのであるから，授業の中でも少しの時間をとって辞書を活用していくべきであると思われる。その際に，指導者は，生徒に自己教育力を育成するという意図を背景にもった辞書指導を行うことが重要ではないだろうか。また，これからは英語の教科のみならず，他教科にわたって，「学びの道具」の使い方を身につけさせる指導が必要ではないかと考えられる。

本研究では，英語の授業において，辞書を活用することは，生徒が言語を学ぶ喜びを知り，自己教育力の育成に繋がるのではないかと，という結論に至った。しかし，今回の授業実践においては，短期間であ

ったため生徒に自己教育力を育成することができたかについて詳しく調べることができなかった。今後、授業の中で辞書を継続して活用することによって、生徒の自己教育力を育成することができるかについては、さらなる研究が求められる。

引用・参考文献

浅羽亮一 1997 「英語教育における英和辞典について—学習者の立場から—」明海大学外国語学部論集 第9集 pp.123-137

稲垣忠彦 2003 『シリーズ「子どもたちと創る総合学習」教室から生まれた物語』 株式会社評論社

市川伸一 2004 『学ぶ意欲とスキルを育てる いま求められる学力向上策』 小学館

井上祐子・多良静也 2004 「英和辞書指導に関する教員の意識調査と現状—高知県内中学・高校英語教員を対象として—」高知大学教育学部研究報告書 第64号；pp.69-80

太田 洋・金谷憲・小菅敦子 干臺滋之 著 2003 『英語力はどのように伸びてゆくか 中学生の英語習得過程を追う』 大修館書店

大西 博人 1999 『高校教師より中学英語教師への疑問・要望』英語教育 1月号 pp.22-24

荻野 敏 1995 『辞書指導としての「学習英和辞典検討レポート」』大塚英語教育研究会 pp.84-89.

奥津文夫 1983 『辞書指導の留意点』英語教育 12月号 pp.9-11

笠島準一 2002 『英語辞典を使いこなす』 講談社学術文庫

片山嘉雄・遠藤栄一・佐々木昭・松村幹男 編 1994 『改訂版 新・英語科教育の研究』 大修館書店

木村哲也 2001 『辞書という本を「読む」技術』 研究社出版

隈部直光 1997 『新1年生に英語をどう教えるか』

<http://www.obunsha.co.jp/argu/html/largu2-1.html>

小林ひろみ 2005 「辞書指導」JACET（大学英語教育学会）教育問題研究会『新英語科教育の基礎と実践—授業力のさらなる向上を目指して』株式会社三修社，pp.155-163

斉藤栄二 著 1996 『英語授業レベルアップの基礎』 大修館書店

斉藤栄二・鈴木寿一編著 2000 『より良い英語授業を目指して 教師の疑問と悩みにこたえる』 大修館書店

斉藤兆史 著 2004 『英語達人塾 極めるための独習法指南』中公新書

Jeremy Harmer 著 渡邊時夫・高梨康雄 監訳 『21世紀の英語教育を考える 実践的英語教育の進め方—小学生から一般社会人の指導まで—』 ピアソン・エデュケーション

柴田義松 著 2000 『教育課程 カリキュラム入門』有斐閣コンパクト

鈴木光治 1987 「自立した英語学習と辞書」新英語教育講座編集委員会『辞書・単語指導 新英語科教育講座 その理論・実践・技術』三友社出版，pp.15-32

住出勝則 2002 『英語力を上げる辞書 120%活用術』研究社

諏訪部 真・望月昭彦・白畑知彦 1997 『小学校から大学まで 英語の授業実践』 大修館書店

高橋正夫 2003 『実践的コミュニケーションの指導』大修館書店

瀧口優一 著 2003 『アイデア集 「苦手」を「好き」に変える 英語授業』 大修館書店

武田 忠 1999 『学ぶ力をうばう教育 考えない学生はなぜ生まれるのか』 新曜社

谷口賢一郎 1998 『英語教育改善へのフィロソフィー 21世紀の国際教育―新指導要領に向けて』 大修館書店

土屋澄男・広野威志 著 2000 『新英語科教育法入門』研究者出版

豊田一男 1986 「正しく与え正しく引かせ活用させる指導法」中村隆弘『実践・英語教育大系<全 28 巻> 7 辞書・事典の指導』 開隆堂出版株式会社, pp.139-150

豊田一男 2003 「高校入学時における辞書指導の基礎」 石黒昭博・山内信幸・赤松信彦・北林利治『現代の英語科教育法』英宝社, pp.269-275

中村隆弘 1986 『実践・英語教育大系<全 28 巻> 7 辞書・事典の指導』 開隆堂出版株式会社

西村公正・須賀廣・鷹家秀史 2000 「学習英和辞典はどのように利用されているか?―大学生・高校生 881 名の利用状況の分析―」関西外国語大学研究論文集 第 71 号 ; pp.277-293

畠山 豪 2001 「辞書指導の必要性和重要性～大学生の学習英和辞典の利用に関する調査から～」盛岡大学英語英米文学会会報 pp.60-68

浜野 実 著 1999 『英和辞書を使いこなそう』岩波ジュニア新書

早川 勇 1990 『英語辞書へのプロムナード』三友社出版

原田昌明 1996 『英語教師のパワーブック』大修館書店

毛利公也 2004 『英語の語彙指導 あの手この手』溪水社

文部科学省 2003 『「英語が使える日本人」の育成のための英語教育研修ガイドブック』開隆堂出版株式会社

文部省 1998 『中学校学習指導要領』大蔵省印刷局

文部省 1999 『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—外国語編一』東京書籍

山岸勝栄 1997 『英語教育と辞書』三省堂

山岸勝栄 1998 『英語教育と辞書の思想と実践』こびあん書房

米山朝二 著 1998 『基礎能力をつける英語指導法—言語活動を中心に』大修館書店

米山朝二 著 2003 『英語教育指導法事典』株式会社 研究社

巻末資料

第1回目アンケート ()年()組()

質問① あなたは、英語が好きですか？

- a. ()とても好き
- b. ()まあまあ好き
- c. ()好き
- d. ()あまり好きでない
- e. ()好きでない

質問② あなたは、英語の学習をする上で、辞書を使いますか？

- a. ()毎回使う
- b. ()よく使う
- c. ()時々使う
- d. ()ほとんど使っていない
- e. ()使っていない

質問③ あなたは、新出単語を調べる時、どのようにして調べますか？

- a. ()英和辞書
- b. ()電子辞書
- c. ()教科書のうしろ
- d. ()教科書ガイドなどの参考書
- e. その他 ()

質問④ あなたは、どのような場面で辞書を引きますか？(複数回答可)

- a. ()分からない単語を調べるとき
- b. ()授業の中で、先生に指示されたとき
- c. ()テスト前
- d. ()宿題
- e. その他 ()

質問⑤ あなたは、辞書を引くことが楽しいですか？

- a. () たいへん楽しい
- b. () まあまあ楽しい
- c. () 楽しい
- d. () あまり楽しくない
- e. () 楽しくない

第2回アンケート ()年()組()

質問① あなたは、辞書作りをしてどのようなことに気づきましたか？

質問② あなたは、辞書を引くことが楽しくなりましたか？

また、選んだ理由を書いてください。理由

- a. () とても楽しくなった
- b. () まあまあ楽しくなった
- c. () 以前と変わらない
- d. () あまり楽しくない
- e. () 楽しくない

質問③ あなたは、今回の活動を通して辞書を以前より身近に感じましたか？

- a. () とても身近に感じた
- b. () まあまあ身近に感じた
- c. () 以前と変わらない
- d. () あまり身近に感じない
- e. () 身近に感じない

質問④ 今回の辞書づくりを通して感想や意見を書いてください。

謝 辞

本研究を進めるにあたり，様々な場面でご助言やご指導をいただきました総合学習系講座の先生方に，心より感謝申し上げます。

指導教官であります兵庫教育大学助教授 鈴木正敏先生には，研究の基礎から論文執筆に関しまして，温かくご指導，ご助言いただきましたことを深く感謝申し上げます。

主任指導教官であります成瀬敏郎教授にはご多忙の中，折に触れ，温かいご教示をいただいたことに深く感謝申し上げます。

また，鈴木研究室で多くのご助言をいただきました，田鍋敦子先生，松下千佳さんには，心より感謝申し上げます。

1年間，鈴木研究室で共に学びあえた，赤松啓介先生，三浦充裕さん，そして2回生の加納由美子さん，松岡杏里さんとは，英語教育の内容のみならず，様々なことに関して深く語り合い，研究における楽しさを感じることができました。本当にありがとうございます。

お忙しい中，長期の研究にわたりご協力くださいました中学校・高校の諸先生方，中学生の皆さんのおかげで，本論文を作成することができました。みなさまに心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが，この2年間，私を応援し支え続けてくれた家族に感謝の気持ちを送りたいと思います。

2005 年 12 月 20 日

和泉屋 喜子